

渡辺克己著



第二十五章●滝尾かいわい②



奥付け／デジタルブックについて

- ・碓島
- ・マンドロ
- ・曲の地蔵祭り
- ・岩くつの仏たち
- ・古代人の遺跡
- ・手習い
- ・街道の馬子歌
- ・あの人この人
- ・政治橋

第二十五章 ● 滝尾かいわい②

発行に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37（1962）年 11 月から翌 38（1963）年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58（1983）年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8（1962～63）年当時のことです。

▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58（1983）年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。

碓島

田園のまん中に、まるで持つてきて置いたように、こじんまりと盛り上がっている小さな山塊。滝尾のどこからでもながめることのできる、この緑濃い碓（いかり）島は、遠い昔から、滝尾の人々の心のふるさととなっていたことだろう。

津守で老人が話していた。

「のらで働いているときは、碓島の影が、どのあたりにきたから何時ぐらいだと、その影で仕事の切れ目をつけたものだった」時計などというものは、お金持ちしか持っていなかった明治時代の話だが、それは何百年も昔から、碓島をとりまく住民の生活の中にとけこんでいたのだろう。

陸地にある小山を島と呼ぶのは妙だが、伝説では、太古このあたりは海で、碓島はそのすそを波に洗われていた。神武天皇が東征の途、この島に軍船のイカリをおろして休息した。それで碓島と呼んだとある。

五、六十年前に碓島の山中から土製のユラ（網につけるオモリ）を発掘したことがあると古老が話していた。地質学的には坊ヶ小路のあたりから、牧、東大分にわたって海岸線だったことはほぼ間違いない。しかし弥生文化時代には海岸線はすでに後退していたということだ。神武天皇伝説はさておいて、遠い昔碓島が「島」であったという伝説はまんざら架空の話とはいえない。

滝尾が海であったとする話にまつわるものでは、碓島の岩は三月と八月に白く塩をふくといわれる。また碓島の北の方にコ

モズイと呼ぶ土地があり、ここで海水がウズを巻いていたので舟人はコモを投げこんでウズの所在を知り、そこを避けて通つたと伝えられている。また下郡の山付きのあたりにボラが迫つという字名があり、昔ボラがとれていたと伝えられている。捜せばほかにも、こんないい伝えが年寄りの記憶の中に生きているかもしれない。

この伝説の山碓島は、いまは山頂に熊野神社をいただき、豊かな田園を見おろしている。熊野神社は、大友能直が豊後に下つてきて、多くの神社仏閣を勧請したさいに、創建されたと伝えられている。この社は、もとは忠直居館の北側に接してあった。

忠直卿が萩原からこの地に移ったとき、えんぎ直しという意味か、熊野権現縁起絵巻十三巻を熊野神社に寄進している。そのほか朝に夕に縁ばなからおがめるほどの位置にある村の鎮守だ。忠直卿は神社の大だんなどとして奉仕し、神殿の再築や、神事の復活をさせ、さまざまの寄進をしている。

熊野神社が碓島に移つたのは明治の末で、忠直卿の墓も、それを追つて碓島に移され、熊野神社とともに碓島の松風を聞いている。浅からぬ縁というものだ。

忠直卿が寄進した品や筆跡は、社宝として地区内に設けた宝物庫にしまつてある。山上の神社のそばに宝物庫を設けたら盗まれる心配があるからだそうだ。

マンドロ

滝尾山には、昔三つの社があつて、滝尾一帯の鎮守とあがめ

られていたということで、羽田の大分神社と、下郡の霜凝神社は、その三社の中の二つが、それぞれ村に下がってきたもの。大分神社のあった上滝尾山には、村の墓地をとむらうために滝尾山西寒多寺という寺がいっしょにあった。この寺が神社を支配していたので、もとは神社も西寒多神社と呼んでいたのである。大分神社となったのは明治になってからだそうで、東植田の西寒多神社と同名ではいろいろと問題が起ころるので、こちら側が名を変えることになったものらしい。どちらが西寒多社の本家か、はつきりしたことはわからないが、滝尾の人は、いまでも「西寒多社はこちらが本家」と信じている。

霜凝神社は、滝尾山の時代は中滝尾の社と呼んで、城東第一の神社の権威を維持していたということだ。大分川のほとりにお渡り所があり、放生会の神事を行なっていた。放生川のおとは、いまでも権現川と呼び、おみこしをすえた「みこし石」「御幸所」「さじき畑」などの地名が残っているという。当時の盛大な社殿は天正の兵乱で焼かれ、のちに下郡の人が村内に小社を建てたのが現在のおやしるだ。下郡の名は、この霜凝社から出たもの。

村のいい伝えでは、滝尾山の三社時代は、ずいぶん盛んな祭りが行なわれていたもので、祭り中は遊女屋までたつほどの、市のにぎわいを呈した。いまでも神社のあった近くに女屋敷（おんなやしき）という地名がある。いい伝えでは、ここに遊女屋があったというのである。

戦前までは、霜凝社のお祭りは、近在から渡り拍子の応援もやってきて、滝尾山の神社跡と、大分川原の放生会跡に隔年に

お渡りをしていたのだそうだが、いまはお渡りもせず、さびれる一方だ。

お祭りといえば、盆の三日間、碓島の観音さまの火祭りは雄壮だった。山頂の、村からのぞめる位置に三十三の塚をしつらえてあつて、その上にコエ松を積んで燃やすのだった。これをマンドロと称した。村の若者たちがマンドロ係りで、火の番をするのだが、山の下から世話人が火を見上げていて、「何番目の火が弱いぞ」などと大声でさしずして、火勢をそろえたものだという。十四日から三日間マンドロの火は碓島の空を赤く染めたが、最後の十六日は、送りマンドロと称して、とくに盛大に終夜燃やし続けた。

このマンドロに付随した余興がまたこどもたちの楽しみだった。麦からカズラで束ねた、ひとかかえもあるような球を作つて、こどもたちは碓島に登つた。あいずと共にマンドロの火をこれに移して、長く付けてあるカズラの端をしっかりと握り、勢いをつけて振り廻し始める。ワラ球はうなりをあげて火勢をつのらせ空中におどつた。

そしてところを見はからつて「ヨイヤカラー」の掛け声とともに山の下に投げおろすのだった。数十の火の球が夜空に乱舞して落下してくるさまは、まことに壮麗な見ものだった。これをこどもたちはマンドロと呼んだ。

明治の末、熊野社が碓島に移つてから火災になることを恐れて、この火祭りは廃止された。碓島の北方にある平野山でも碓島に呼応してマンドロをやっていたが、これも同時に取りやめた。

曲の地蔵祭り

曲の地蔵祭りの万灯ろうも楽しい行事だった。

曲のちよどもまん中へん、道がカギの手になっているかどに、古ぼけた地蔵堂があつて、十数体のお地蔵さまが並んでござる。いつから、どういういわれで、ここにお地蔵さまが鎮座したのか、もう村の人はなにも知らないが、八月二十三日の地蔵祭りは祖先から引き継いで絶やさない。

いまは、万灯ろうは、豆電球に変わつて、昔ながらのたんぼのくろにかわいいあかりが並ぶが、戦前まで灯ろうを立て並べた。

木のワクに新しい紙を張つて、これに楽しい絵などを書いたのもあつた。あかりの乏しい農村の夜、そろそろ穂が出るほどに伸びた稲の緑が、万灯ろうのほのかなあかりに浮かびあがつて、さやさやとゆれるさまは、こどもたちを夢の国にさそうにじゅうぶんだった。

万灯ろうのロウソクが風で消えるので、消えたらすぐとぼすように、万灯ろう番が、つきつきりているのもうれしい風景だった。

この地蔵祭りの余興に、地区内数カ所に見立て細工が飾られるのも、曲の人々の自慢だった。地区内に器用な人がいて人形の飾りつけをしていたのだそうで、他村からも見物にくるほどのできばえだったということだ。見立て細工は、大正時代にはなくなつてしまつたが、万灯ろうだけは戦後豆電球に変わったとはいうものの、その形だけは今日まで絶えないでいる。

信仰にささえられた、このような清らかな行事が、農村からもしだいに影をひそめていくのは寂しいことだ。せめて曲の地藏祭りだけは、お地藏さまが存在するかぎり絶やさないでほしいもの。

曲の老人の話によると、明治年代には、賀来の市の日に万灯ろうを立てたという。賀来の市と曲と、どういう関係があったのだろうか。そういう因縁については、もう知っている人はいない。

消えた行事といえば滝尾かいわいの盆踊りにはぎやかだった。若い人たちは、残らず踊りに出たものだ。各地区の中央に踊り場ができ、供養踊りが夜つびて行なわれた。地区内の物持ちといわれる家では四斗ダルをぶちぬいて踊り子たちにふるまい、にぎり飯を山のようにかつぎこんだものだった。

踊りの好きな若い人たちは、村内で踊り抜くと、こんどは他村まで遠征をやったものだ。遠く東植田や判田方面まで出かけるものもあった。

岩くつの仏たち

とかく忘れられがちだが、曲には「大分の石仏」の系列にはいる磨崖石仏がある。

農協売店の横の道をはいって、岩を刻んだような坂道を登りつめたところに、大小二つの岩くつがある。大きい方の岩くつには、元町の岩薬師ほどもある、丸彫りの釈迦如来、その入口左右には持国天、多聞天が力んだ姿の磨崖仏、小さい方の岩く

つには三尊像の磨崖仏。

丸彫りの釈迦如来は、ここのがけをけずり取って丸彫りにしたのか、よそから持ってきたものかわからないが、伝説では、碓島の近くの池の中にあつたのを引き上げて、ここに運んだという。この仏さまの首はいたましくも胴から離れている。明治になる前、大地震があつて、そのとき首のつけ根から折れてころげ落ちたのだそうで、もげた首がコロコロと坂道をころげて、ムラまでやってきたと伝えられている。

小岩くつの等身大の三尊座像磨崖仏は、すっかり摩滅して、お顔たちもさだかでない。これは鎌倉時代前後の作だというが、こう摩滅してはねうちもなからう。

大分の石仏を調査にくる学者は、たいいてい元町石仏を見たついでに曲までやってくるが、入り口左右の持国天、多聞天像をほめてゆくぐらいのもので、あまりもてはやされない。だから一般からも忘れられがちなのだ。

ここの仏たちにしてみれば、見物の俗人たちの興味の目にさらされ、そこらあたりを汚されるより、ひっそりと冥（めい）想にふけつていられるほうがしあわせかもしれない。それに、私の見たかぎりの石仏のなかでは、ムラの人たちにたいせつにされているのは、曲の石仏が一番だった。岩くつ内も参道も、きれいにはき清められ、石仏の前には新しい花さえ飾つてあつた。

もとは、春と秋の二回、石仏のあるムラの人々がお赤飯をたき、お参りの人におせつたいをしたものだそうで、ときには浪曲師を招いて地区内で催すなど、石仏祭りに真心をこめたとい

う。いまでも、おせつただけは絶やさない。

曲の古老大津留部さんの話では、ここに「エンジヨウ（延城か）寺」という大きなお寺があったと伝えられているという。

がんらい、この石仏のある山は森岡山といい、山上に城があったと伝えられている。大友時代に東方を固める一つの出城だったのではないかという話もある。その城の名を「鳶（トビ）ケ城」と呼んでいたという。つまり「エンジヨウ（鳶城）」だ。城にゆかりの寺。なにかいわくがありそうだ。

昔、この森岡山をめぐって、四国八十八カ所に模したお地藏さまが八十八体あったが、明治の廃仏毀釈騒動で片づけられたそうで、その一部が、石仏の岩くつの中に同居して余命を保っている。

ところで森岡山上には、こんど市営の第二浄水池ができる。世の激しい変遷に、石の仏たちも、だんだん身の置き場所が狭くなつてゆく。お心も安まるまい。

古代人の遺跡

羽田の大分神社前の道をまっすぐ、豊肥線の踏み切りを越えてゆくと、山すそに滝尾中学校の校舎が明るく太陽をはねかえしているのに突き当たる。

そして初めてここをおとずれる人ならばらく足をとめて、ここの異様な風景に首をかしげる。

中学校の校庭に接続して、びょうぶを立てたようにきりたった南面のガケ一面に大小さまざまな横穴が暗い口をあけている

からだ。

これが「滝尾四十九穴」または「滝尾百穴」と呼ばれる古代人の遺跡である。

このあたりの地名は「岩屋」。昭和になって考古学者が「横穴墳跡」と結論づけるまでは、古代人の住居跡と思われていた。村に伝わる伝説も、大昔、火の雨が降って、穴住まいをしたということになっている。

両側はいくぶん樹木におおわれているが、ほとんどは、もろい岩質を露出して、しらしらと日を吸い込んでいる。けずりつたような垂直の岩壁で、風や雨に表面が砂のようにもろくなつてはげ落ちるために、草も木もはえないのだろう。そのために、その古墳群はめつぽう明るい。元来、古墳のような遺跡は、深いヤブにおおわれて、じめじめした陰気なものがただよっているものだが、これはからつとして、岩壁のすそぎりぎりまで広がった中学校の校庭を見おろしているのである。



曲の石仏（挿絵：田中 昇）

この古墳群のそばに学校ができたのは昭和六年。尋常小学校を卒業した者に実業教育をすることを目的に、全国では初めての試みとして生まれた三年制の「公民学校」という名の学校であった。

「農業を通じて科学する教育ということを目標につくったもので、農業の科学化への基礎づくりをやった。高等小学校は別にあつたが、公民学校ができてからは、高等小学校の方は名ばかりで、生徒はみな公民学校にきてしまった」

と、滝尾農協長の二宮義雄さんが話していた。

戦時中に公民学校は青年学校となり、戦後新制中学校に生まれ変わった。

公民学校から中学校へ、すでに三十数年間、横穴古墳を見上げつつ学び、遊び、巣立っていった子どもたち。そしていまも、この岩壁の下で、子どもたちは元気な歓声を終日あげている。

この子どもたちは、千数百年、あるいはもつと古い昔、この地に生活をし、死んでいった祖先たちの残した跡——この風雨に耐えてきた遺跡を、どんな思いで見上げてきたのだろうか。

とにかく、子どもたちが、いたずらをして、こわさなかったことだけでもありがたい。

手習い

滝尾に小学校ができたのは明治八年。羽田のいまの小学校の南のすみぐらいに当たる位置にあつた。校舎はワラ屋根の古家を買ったのだそうだが、当時入学した老人の話によると、ひど

いボロ家で、三、四十人の生徒がはいりきれなかったほどだったという。最初の先生は佐藤高二という人で、翌年校長に津守策馬さんが任命され正規の学校となり、羽田学校と称した。そしてその年に津守、翌年下郡に分教場を設けて生徒を分散させた。

小学校は四年制の義務教育で、もちろん月謝はとらなかつたが、貧しい小作農ではこどもの教育まで手が届かない。女の子は八歳位になると子もり奉公に出して食いぶちを減らさねばならないほどだ。だから政府が就学奨励にやっきとなつても、あるていど余裕のある家でないとい腰を上げなかつた。

まして高等小学校に進学させることはたいへんなことだつた。明治二十年に大分町に組合立の高等小学校（四年制）ができたのだが、当時の月謝は三十五銭。安くない金額だ。滝尾から進学させたものは一人か二人ぐらいのものだった。

ことし八十九歳で曲に健在の大津留部さんは、いまの電話局のところ（勘定所跡）に高等小学校があつた当時に進学した一人だが、卒業すると、すぐ母校羽田小学校の代用教員に採用された。高等小学校を出れば、いっぱしの知識層だったわけだ。

明治の末ごろの話だが、兵隊検査に合格と決まると、入隊後家郷に手紙が書けないでは困るというので、にわか勉強を初めるものが多かった。津守に昔刈順造という漢学の先生がいて、塾を開いていた。この塾で入隊まで、かなくぎ流ながらどうやら手紙が書けるまで勉強したということだ。

ところが、こうして手習いをして入隊した者から、さっそくたよりが届くのはいいが、受けとった者が文盲のチンプンカン

ブンときているから一苦勞。村内の読み書きのできる人のところに駆けこんで、読んでもらったうえに、返事の代筆までしてもらわねばならなかった。

当時「津守巡査」ということばがあった。軍隊から帰っても、貧しい小作生活が待っているだけではやりきれない。せめて巡査にでもなつて、軍隊生活を生かそうと、さらに漢学塾の門をたたいて勉強し巡査募集に応じたものだ。その巡査志望者が、津守はとくに多かったので「津守巡査」の名が生まれたのだということだ。

街道の馬子歌

いまは府内大橋ができて路線が滝尾をそれてしまったが、もともと広瀬橋を渡つて富岡、曲から東植田へ抜ける日向街道（戸次街道）は、大分の町が奥地と結ぶ大切な路線であり、富岡はその街道の町として発展を期待されたものだ。

明治新政になつてから、日向街道が国道に指定された。そのとき国道沿いの地の利を生かして富岡を大いに売り出そうというので町内の人々が町作りにも力こぶを入れたのである。人馬の往来も盛んで、力こぶを入れるだけの理由もあった。

明治中期ごろには、すでに呉服屋、菓子屋、材木屋、宿屋、それにチョウチン屋、カサ屋、紺屋（染物屋）しようゆ醸造業までできていた。当然旅行者を相手とする煮売り屋や赤チョウチンも軒を並べていた。高瀬屋という呉服屋などは、大分の町の有力店と肩を並べるほどののれんを張っていたものだ。明治

も後半期にはいると、「豊の海」「大典正宗」の二つの造り酒屋が生まれて酒倉を建て並べ、製糸工場も創立された。

このように商店街への発展も大正になって日豊線、豊肥線が建設され、街道の往来がさびれるとばったり行き詰まってしまった。いま富岡を歩くと、明治時代の繁華な町への希望をはらんでいたおもかげに、ふと行き当たる。赤チヨウチンだった店作りなども、かすかに残っている。

そのころ――朝の三時か四時、まだ眠りからさめない街道すじの家々は、白杵から魚を大分の魚市場に運ぶ荷だ（駄）の馬子歌に夢を破られるのが毎朝のことだった。ほとんどきまっていた時刻にそれが通るので、馬子歌と馬の鈴の音が表を過ぎると、ああ、夜明けも間近いなど知るのだった。

シャラン、シャラン、シャランと、馬の首につけた鈴の音に調子を合わせて歌う馬子歌。よほどノド自慢の馬子だったのか声も節も実によかったそうだ。どんな歌詞だったか、記憶している人はいないが明治時代に日向街道沿いに育った人なら、まぐらに通う馬子歌に聞きほれた思い出があるはず。

大分大学の故半田康夫教授といっしょに大分県の民謡調査をした音楽家の加藤正人さんが、白杵の望月付近の古老が馬子歌（駄賃取り歌）を記憶していたと教えてくれた。白杵に水揚げされた魚を、大分の魚市場に急送するような健脚を要する仕事は、あるいは望月あたりの人が担当していたのかもしれない。

白杵のウオインタナ（魚河岸）を前夜出発した魚の荷だ（駄）は、未明に滝尾付近に元気な歌声を残して、広瀬橋を一番に渡り、上野の峠を越して、東新町、塩九升、米屋町を抜けて大分

の町にはいった。堀川にあった魚市場に着くころにようやく夜がしらじらと明けかかる。

望月に残っていた駄賃取り歌はこんな文句だった。

ハ― 竹田ゆきすりゃヨイ 雪霜かかるヨ

もどりゃ妻子がはいかかる シャガン、シャガン

ハ― 駒の腹まきにヨイ わしの名を入れてヨ

竹田あたりに名を残す シャガン、シャガン

ハ― 別府浜脇ゆヨイ 泣いて通るカラスヨ

金はもたいでカオカオと シャガン、シャガン

(シャガン、シャガンは馬の鈴の音を歌ったものである)

あの人この人

富岡で、昔ながらののれんを守り続けている造り酒屋「豊の海」は明治三十二年に財津貞造さんが創設した。現在は三代目の敬作さんが店をきりまわしている。

貞造さんの経歴はおもしろい。北海道郡青江村（現津久見市）の中野家の出身で、最初獣医になるつもりで獣医学校に学び、ついで南洋で羊牧の事業を志し、東京の日本英語学校というのに入学して語学を勉強、海外雄飛の準備をやっていてところを、当時大野郡長をやっていた財津準一さんに見こまれて養子となり、一転して醸造業を初めて大をなした。ついで獣医学校に学んだ知識を活用して、羊ならぬ乳牛事業に目をつけて明治四十一年に大分牧畜株式会社を創立し、その社長となるなど、なかなか進歩的な活動家であった。

貞造さんの実弟門平さんもすぐれた人物だった。別府の豪商二代目山田耕平さんにほれられて養子に迎えられ、三代目耕平を継いで県会議員にうって出るなど政界にも活躍している。

「大典正宗」は秦兵蔵さんが、「豊の海」に前後してはじめ、店も道路をはさんで両店が向かいあわせのかっこうで盛大にやっていたが、太平洋戦争中の企業整備にかかって消えてしまった。

富岡製糸会社は、現在魚形製繩工場のある位置にあった。明治三十三年丸山階蔵さんが独力で創立したのだった。その前、日活戦争の直後に階蔵さんの兄又作さんが、福島県に養蚕の研究に行き、帰郷すると、広瀬橋の東岸一帯がイモもできない草とヤブの荒地であったのを開墾してクワを植え、新しい技術による養蚕の普及に努めている。その養蚕普及の基礎の上に絹糸の製糸会社が生まれたのだった。最初丸山製糸と呼んでいたようだが、のち富岡製糸と称した。明治年間の大分県下にある個人経営の絹糸製糸工場では屈指のもので、創立当時すでに女工五十人ばかりを使っていた。

大正八年に、世界大戦後の好況に乗じて株式会社組織とし、秦兵蔵、財津貞造、安藤黄揚三、田崎延作など滝尾の有力者十数人が出資し、カマ数を倍にふやして、大々的にやったが、昭和初年の経済恐慌で絹糸が暴落し、たちまちつぶれてしまった。

大正年間に、やはり前記の人たちが共同出資でワラ加工品工場を作り、動力機械などを入れてカマス製造も始めたが、四、五年で閉鎖している。

曲のバス道路に面して大きな石碑が、すそを草に埋めて、手入れをする人もなく建っている。碑面の名は田崎延作と読めた。延作さんは土建業者で、別府浜脇の埋め立て工事を請け合うなど大きな仕事をやっている。ところが、むすこのできが悪かった。浜脇の埋め立て工事費を父親の代理で県庁から受け取り、そのまま行くえをくらました。さらに父親の死後帰ってきて、またたくまに遺産を使い果たし、田崎家は断絶してしまったと地区の人が話していた。いま残っているのは延作さんの生前に、有志によって建立した顕徳碑と、延作さんが寄進した熊野社と柞原社の鳥居だけ。

政治橋

「滝尾橋は政治橋のようなものさ」と下郡の老人たちは笑う。古国府の渡しの方は、木造ながら広瀬橋が明治年間にできたのに、坊ヶ小路の渡しはなかなかできなかった。

明治の末ごろにも滝尾の村民が不自由な事情を述べて県に陳情をくりかえしたが、実現しそもなかった。実現しないのは、滝尾が憲政会でかたまつた村のため政友会の政府である限りは、いうことをきいてくれないからだ。

滝尾津守の出身者で、県政界の大物であった津末長介さんが、憲政会の党員であったのをはじめ滝尾の有志はほとんど憲政会の旗をかかっていたのだ。

ところが大正の初めに憲政会が政権を握った。とたんに、だまっているのに坊ヶ小路の渡しに滝尾橋がどんどんできてし

まった、というのである。政争の激しかった当時のことだから、ありそうな話である。

その後津末良介さんは、木下謙次郎さんとともに、憲政会の大隈内閣が崩壊後、党の方策に不満を表明して脱党してしまった。大分郡を地盤に県議会に出ていた別保出身の阿部征矢太郎さんも憲政会だったが、政友会色のある中立派に走った。そして、征矢太郎さんが政友会に推されて、県議会に当選したところ、木造の滝尾橋をコンクリート橋にしてくれた。この工事は征矢太郎さんが幾度も現場にやってきて大いに督励してくれたそうである。昭和五年ごろの話だ。

広瀬橋は、国道にかかっている橋なのに、小さな橋でしょっちゅう流されていた。明治の末ごろやっと幅九尺の橋となったが、九尺では、馬車が橋上ですれちがえない。向こうから来るのが渡ってしまうまで、こちらの車は橋のたもとで待たねばならなかった。

あるとき、さる宮様が大分県の視察にきて、日向街道を通られた。そのとき案内の県の役人にいったそうだ。

「戸次の方の橋はりっぱなのに、同じ国道上の広瀬橋はどうしてあんなに悪いのか」

その後、いまのような橋になったということだ。

だいたい明治前期ごろまでは、渡し舟はむろんのこと、橋をかけるのも民間人の出資でやっていたのだから、よほどのことでない限り、橋ができるはずはないし、できてもろくなものではない。明治十八年の大分県統計によると、県下で長い橋は駅館川にかかっていた土橋の平田橋が百十八間で最長、次が寄

藻川の浮殿橋が木橋で百十六間。大分川の舞鶴橋は八十間の木橋だった。八坂川の錦江橋、桂川の桂橋なども土橋で長い方だった。

民間出資の橋は、橋賃を徴収しなければやってゆけない。当時の橋賃表をみると、舞鶴橋は人三厘、馬七厘、車一錢。裏川の鶴羽橋は人二厘、馬三厘、車五厘、宮ヶ瀬の板橋が人二厘、馬四厘、車四厘とある。県下各地の橋賃も、だいたいこんなところだった。

坊ヶ小路の渡しや古国府の渡しも藩政時代いくどか板橋をかけ、橋賃をとったが、洪水で流されるので橋をあきらめて、渡し舟の不自由でがまんしていたのである。



オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたく願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタルブック版「大分今昔」 第二十五章 ●滝尾かいわい②

2008年2月1日初版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

著者略歴◇渡辺克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十二年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。